HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	‘共感’の心的デザインの再構築 ： 自他間の情動共有システムを出発点としたボトムアップアプローチ [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	村田, 藍子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12083号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61701
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Aiko_Murata_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　村　田　藍　子

審査委員　主査　准教授　竹　澤　正　哲
副査　教　授　結　城　雅　樹
副査　准教授　小　川　健　二
副査　教　授　亀　田　達　也（東京大学大学院人文社会系研究科）

学位論文題名
‘共感’の心的デザインの再構築
−自他間の情動共有システムを出発点としたボトムアップアプローチ

共感性は人類が集団生活において互いに協調・協力する中で進化的に獲得されてきた心的機能であり、複雑な社会的相互作用を支える基盤であると考えられる。ただし、「共感」は、他者の苦しみや悲しみを分かち合うといったポジティブな印象を抱かせがちであるが、その一方で、主要素である「他者の心を読むこと」は他者を出し抜いたり陥れたりするために用いられるという側面も併せ持ち、多元的な現象群であることが知られている。従来の研究では、共感の特定の側面に焦点を当てたアプローチが独立に展開されてきたため、それぞれの側面がどのように関わり合い、社会行動に寄与しているのかについて検討することが困難であった。本論文はこうした問題を受け、共感と呼ばれる現象群を、自動的・反射的に駆動される自他間の情動共有と、高次の認知処理を要する他者の心的状態の推論に大別した上で、各システムがどのような場面で要請されるか、また、相互に干渉し合うのかについて一連の行動実験により検討している。その上で、他者の心的状態の推論と情動共有の相互作用が向社会的行動の基盤となる可能性や、情動共有が集団行動に及ぼす影響について実証的知見を元に考察している。

本論文は以下のように展開されている。

まず第１章では、共感について社会神経科学の知見を基に整理している。従来の研究が抱える限界として、他者の心的状態の推論を要求する課題か、他者が苦痛を受ける場面を見せ、反応を計測する課題のどちらか一方を用いてきたために、心的状態の推論と情動共有の過程が独立に検討されており、システム間の相互関係は明らかにされていないという点が指摘される。これを受け、情動共有と心的状態の推論の一方、または両方がどのように社会行動に寄与しているかを明らかにする上で、二つのシステム間の相互関係を実証的に検討することの重要性が論じられている。

第２章では、相手の心的状態の推論を要請する教示が情動共有にどのような影響を及ぼすか検討した実験研究について報告されている。ここでは特に情動共有のプロセスを担う表情模倣と呼ばれる現象について検討され、これまで伝統的には文脈に依存せず自動的に起きると考えられてきた情動共有が、他者の心的推論を担う高次の認知過程によって修飾を受けるという相互関係を実証的に示した。

第３章では、第２章で例証されたような情動共有と心的状態の推論の相互関係が向社会行動にどのように寄与しているのかを検討した実験研究について報告され、心的状態の推論に基づいて情動共有を調整する制御機構が向社会的行動を下支えしている可能性が示唆された。

以上から、特に向社会行動において心的状態の推論に基づく制御機能が重要な役割をもつことが示されたが、第４章では転じて、情動共有が社会的相互作用にどのように寄与するのかを検討した実験研究が報告され、情動共有が双方向的に生じることによって、各人の情動反応が増幅するというマクロな影響が生じうることが示唆された。第５章においてはこれまでの実験研究について総合的な考察を加えな

がら、本論文で報告した実証研究の手法を発展させることが、社会における、個の振る舞いの単純な総和として捉えきれない集団行動を予測する上で重要な示唆を提供する可能性について議論されている。

本論文を構成する理論モデルや文献レビュー、実験などは、*Personality and Social Psychology Bulletin*、認知科学における学術論文、「情動と意思決定」（朝倉書店）所収のチャプターとして公刊され、国内外で高い評価を得ている。また、村田藍子氏のこれらの研究成果については、日本認知科学会における大会発表賞や日本人間行動進化学会における２回の学会賞などが授与されるとともに、本研究テーマに関わる総説を、第一著者として、『心理学評論』に印刷中であり、多層的な共感現象について、ボトムアップ的な情動共感と、制御的な高次共感の交絡という観点から、丹念な概念的整理を行っている。また、実験の成果の一部は査読付国際誌である *PLoS ONE* にも第一著者として投稿しており、現在、改稿中である。このように本論文の研究成果は、ヒトの共感性を行動科学と生物学の両面から統合的に解明しようとする最先端研究として、高い注目を集めている。

本論文にはさらなる実証的・理論的な検討を要する部分も認められ、改善の余地は残るものの、全体を通じて得られた学術的知見の独自性については高く評価できるものである。本論文は、ヒトの共感性についての理論的検討、独自の実証パラダイムの開発、及び、そこから得られた経験的知見の新規性の両面で学術論文として重要な貢献をするものと判断され、当審査委員会は全員一致で博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。